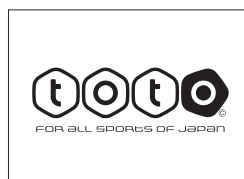


誰もが世界一になれるわけでもない
誰もが日本代表になれるわけでもない
それでも人はスポーツをする
昨日の自分に追い越されないために
明日の自分を追い越すために
スポーツに鍛えられた人生は
勝っても負けても きっと負けない

スポーツは、自分を超越するためにある。

スポーツくじ



スポーツくじ (toto・BIG) の収益は、日本のスポーツを
育てるために使われています。

編集後記

3月3日に行われた東京マラソン2019では、冷たい雨の中、38,000人のランナーが都内マラソンコースを駆け抜けた。悪コンディションの中、エリートランナーも市民ランナーも老若男女が懸命に走る姿は感動的でした。東京マラソンは相変わらずの人気のため、今回の抽選倍率も12.1倍になった。日本国民、否、世界中の人々が好んでマラソンを走る。”Born to Run”と言われるように、人類は長距離を走るように進化してきたという学説がある。もともと人間は走るが好きなのである。現代人といえどもその例外ではない。

ところが、現代の子どもたちはどうやらそうでもないらしい。小学生、中学生、高校生合計2,400人を対象に持久走・長距離走への態度を調査した研究結果によると（小磯透ら，ランニング学研究，2017）、小学校1年生の9割は走ることが好きであったのが、学年が進むにつれて嫌いがどんどん増え、高校生になると好き嫌いが全く逆転し9割が嫌いになってしまう。そして、学校を卒業してから、あるいは定年を過ぎてから、また走り始める。やはり、人間は走るのが好きなのである。すると、どう考えても現代の体育は子どもたちをランニング嫌いへ追いやっているとした解釈せざるを得ない。むしろ、その分析は慎重でなければならないが、体育の授業やクラブ活動での評価がパフォーマンスあるいは記録に偏りすぎていることも一因であろう。長距離を全力で走ることが前提であり、その記録で子どもたちは評価される。いつしか、持久走、長距離走は「苦しい」ものというイメージが固まり、本来の”Born to Run”が変形してしまったのである。

本号の特集では、「身体リテラシー」を取り上げた。子どものころの身体活動、スポーツ活動では、まず基礎をしっかり育てることが大切であり、その基礎を「身体リテラシー」と総称する。本特集では、子どものころはこの身体リテラシーの育成を主眼に置くべきことが種々の観点から論じられている。将来、パフォーマンス向上をめざすエリートランナーにもランニングを楽しむ市民ランナーにも、その基礎づくりがあつてのことと腑に落ちる。そしてそれは、何も特別なことではない。我が国においても昭和以前の時代なら、子どもたちだけでかけっこをしたり鬼ごっこをしたりして、遊びながら自然に身体リテラシーを育む環境が豊富に存在していた。都市化が進み、大人の関与が強くなるにつれて、いつの間にかそうした環境が乏しくなってきた。それが、子どものランニング嫌いにつながっていると思えてならない。平成の時代が終わり新しい御代を迎え、子どものランニング嫌いのこと、身体リテラシー育成のことをもう一度考え直してみるべき、と強く思うのである。

2019年3月

文責 伊藤静夫

【陸上競技研究紀要第14巻 編集委員会】

伊藤静夫（編集委員長）、榎本靖士（編集副委員長）、
高松潤二、森丘保典、青山清英、高橋義雄、桜井智野風、安井年文、眞鍋芳明

【日本陸上競技連盟・事務局】

磯貝美奈子・八幡賢司・大野果歩

「陸上競技研究紀要」第14巻

2019年3月1日発行

発行人 尾縣 貢

発行所 公益財団法人日本陸上競技連盟

〒163-0717 東京都新宿区西新宿2-7-1 小田急第一生命ビル17階

TEL : 03-5321-6580

Bulletin of Studies in Athletics of JAAF

JAAF Japan Association of
Athletics Federations

